

健康管理住民が率先

過疎高齢化の錦町宇佐で研究

宇部の長谷医師

過疎、高齢化の進む若

国市錦町宇佐地区をモデルケースに、宇部市の長谷亮佑医師(35)が、住民同士で健康を支え合う仕組みづくりを目指し、研究を重ねている。慢性症状を抱える高齢者が、近くに医師がいなくても不安なく日常生活を送れるような体制をどう整えるかがテーマ。同地区での相談会を通じてニーズを把握し、健康管理のプランを練る。(佐々木裕介)



長谷亮佑医師



宇佐地区の住民(手前右)から生活状況を聞き取る山口大医学部の学生(1日)

相談会でニーズ把握

山口大医学部非常勤講師でもある長谷医師は昨年4月、身近にできる健康づくりに取り組むつと二人で市民団体「山口ヘルスプロジェクト」をつくった。同団体の活動として今年1日、山口大医学部の学生7人もボランティアに参加し、同地区で3

回目の相談会を開催。住民15人から家族構成や話し相手、日常生活の満足度など30項目の質問を聞き取った。

長谷医師は昨年12月と、ことし4月にも同地区で相談会を開き、健康面の困りごとを聞き取って回答したり、体調悪化に早く気付くポイントを説明したり

してきた。今後、3回の相談会での聞き取りを整理し、住民によるサポート体制をどう整えるか、など課題を洗い出す。

宇佐地区は、約90世帯150人が暮らし、65歳以上が4分の3を占める。全住民は2年前に宇佐地区助け合い組織を発足させ、一人

暮らし世帯の見守り活動などに取り組んでいる。同組織事務局担当の今井達志さん(68)は「健康面のケアは考えていなかった。相談会を通じ、病気は家に閉じこもるものではなく、あつて当たり前と意識が変われば、地域が元気になる」と期待する。

長谷医師は「住民同士で日々の生活を見守り、病気の早期発見に

つながる健康チェックができれば、常駐の医師がいなくても不安は少なくなる。高血圧や心筋梗塞を抱えていても、生活に満足できているなら健康といっているのではないか。何ができるか、現場で試行錯誤しながら考えた」と話す。